

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 31 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530652

研究課題名(和文) ライフコース・イベントと階層格差

研究課題名(英文) Lifecourse events, stratification and Disparities

## 研究代表者

鹿又 伸夫 (Kanomata, Nobuo)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：30204598

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：各人の経済状態と、ライフコースイベントの結果としての婚姻状況・家族形態との関連を2つの側面から検討した。第1の側面では、貧困リスクに対する婚姻状況・家族類型の影響に焦点をあてた。その結果、これらの影響は就労職業の影響よりも小さかったが、無視できないものだった。とくに女性の貧困リスクは、家族内の相互扶助関係に左右されていた。第2の側面では、無配偶者に較べて、有配偶者の就業所得が高くなる結婚プレミアムと、低くなる結婚ペナルティに焦点をあてた。その結果、男性にプレミアム、女性にペナルティが確認され、これらの現象に階層的地位そしてその稼働力を考慮した配偶者選択が関わっていることを示した。

研究成果の概要(英文)： This study examines two aspects of association between one's state of means and marital status/family type which are the results of life-course event. The first aspect focuses the influence of marital status and family type on poverty risk. The results show that the effects of these factors on the risk are not as strong as those of employment, but are not negligible. The gaps of risk by family type between stages of aging suggest both rise and reduction in risk are dependent on mutual help within a family. The risk of women are more sensitive to the mutual help. The second focuses marriage premium and penalty. After controlling the effects of other variables, both the premium in which wages of married men are higher and the penalty in which wages of married women are lower, comparing with non-married are confirmed. The findings suggest that selection of spouse considering on status and its economic capability is concerned as a factor which brings about marriage premium and penalty.

研究分野：社会学

キーワード：階層格差 ライフコース・イベント 貧困リスク 結婚プレミアム 結婚ペナルティ 配偶者選択

### 1. 研究開始当初の背景

1990年代後半からの所得格差拡大と貧困増加をもたらしたプロセスとメカニズムは十分に解明されていない。それは、格差拡大と貧困増大という実態の変化に対して、社会学で社会的不平等を扱う社会階層・社会移動研究がもっていた既存の枠組とアプローチに限界があったためである。その限界は、第1に、研究対象者を労働市場内の就業者に限定し、正規雇用と非正規雇用を区別してこなかったことである。第2に、各人が享受する経済状況と、家族構成や婚姻状況との関連を扱ってこなかったことである。

要するに、既存の社会階層・社会移動の研究は、安定した雇用構造や家族構造を前提としたものであり、失業や非正規雇用は一時的なもので、未婚継続や離婚、ひとり親世帯が例外的であることを想定したものであった。

### 2. 研究の目的

既存研究では、所得格差および貧困を拡大させてきた要因として、失業や非正規雇用の増加とともに、高齢者世帯、単身世帯、母子世帯、そして高学歴夫婦などの増加が指摘されている。これらは、社会階層・社会移動研究がこれまで重視してきた親および本人の学歴と職業だけでなく、出身家庭の家族的特徴、結婚行動と配偶者選択、有配偶・未婚・離別・死別などの婚姻状況、配偶者の階層的地位、家族構成など、結婚と家族に関するライフコース・イベントが階層的帰結に影響することを示唆する。そのため、無就業・非正規雇用の影響も考慮しながら、所得や貧困という不平等な階層的帰結に対する結婚・家族に関するライフコース・イベントの影響を明らかにすることを主たる研究目的とした。

また、ひとり親家庭出身であることや、キョウダイ数が多いことが教育達成で不利になると指摘されている。進学格差をもたらす要因とメカニズムについて、ライフコース・イベントの1つとしての出身家庭の家族構造(ひとり親家庭出身およびキョウダイ数)の影響も含めて明らかにすることを副次的な研究目的とした。

### 3. 研究の方法

主たる研究目的を遂行するために、「貧困リスクに対する婚姻状況と家族形態の影響」と「結婚プレミアム・結婚ペナルティの発生要因」という2つの研究テーマを設定した。また、第2の研究目的のために、「進学格差発生のメカニズム」という研究テーマを設定した。それぞれ全国調査のデータによって分析を行った。データは、社会階層と社会移動全国調査(SSM調査)を使用した。また分析では、従来の職業階層分類ではなく非正規と無職を含む就労職業分類を使用した。

(1) 貧困リスクに対する婚姻状況と家族形態の影響

貧困におちいらせる要因として、無就業や

非正規雇用を含む就労と職業、そして学歴などの社会階層要因の重要性が減退して、結婚や家族にかかわるライフイベントの重要性が高まったとする議論が現れてきた。そのため、相対的貧困に確率的になりやすくさせる(貧困への所属確率を高める)要因を、SSM調査の1995年(A・B票)と2005年のデータを使用し、男女別にステレオタイプ順序回帰分析を適用して分析した。消費者物価指数で調整した等価所得から、その中央値のその半以下を相対的貧困とする4分類を従属変数とした。投入した要因(独立変数)は、調査時点、年齢段階、本人・配偶者の学歴、本人・配偶者の就労職業、家族形態、婚姻状況(有配偶・未婚・離別・死別)である。

### (2) 結婚プレミアム・ペナルティの発生要因

本人の人的資本の影響を考慮しても、有配偶者の就業所得(賃金)が無配偶者の所得よりも高いことを結婚プレミアム、他方で有配偶者の就業所得が無配偶者の所得よりも低いことを結婚ペナルティという。男性に結婚プレミアム、女性に結婚ペナルティがみられることが各国の研究で確認されてきた。日本の女性にみられる結婚ペナルティについては、結婚を契機とした就業中断によって就労経験年・勤続年数が短くなること、再就業にともなう就業形態や職種の変更が有配偶女性の賃金低下をもたらすためだと説明されてきた。

他方で、社会階層研究では、階層的地位が類似する者どうしが結婚する同類婚傾向が多くの研究で確認されてきた。そこで、SSM調査の1995年(A・B票)と2005年のデータを使用し、男女別に一般線型モデル(GLM)を適用した就業所得の分析によって、階層的な配偶者選択が結婚プレミアムと結婚ペナルティを作り出している可能性を検討した。

### (3) 進学格差発生のメカニズム

なぜ進学格差が発生するかについて、社会階層研究では、さまざまな説が提示されているが、それらの有効性を比較する研究がない。そのため、諸説のなかで有力なものを複数取り上げて、それらの有効性を比較することにした。取り上げたのは文化資本論、相対的リスク回避説、ウイスコンシン・モデル、トラッキング説で、SSM調査の2005年のデータを男女別にステレオタイプ順序回帰分析を適用して分析した。教育達成の研究で標準的方法となった移行モデル(Transition Model)に準拠して、高校進学と高等教育進学の2段階を2つの移行として分析した。また、各説の有効性を比較するため、各説で重視される要因として親の学歴・職業、学業成績、進学意欲、15歳時に家庭で所有されていた自宅・耐久消費財・教養財・書籍数、兄弟数、姉妹数、出生順順位を独立変数として投入した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 貧困リスクに対する婚姻状況と家族形態の影響

分析の結果、下記の知見が得られた。第1に、家計水準と貧困に対して婚姻状況と家族形態がもつ影響は、社会階層要因（とくに就労職業）ほど強くないが、無視できないものだった。第2に、婚姻状況と家族形態からみた貧困リスクの格差は1995年から2005年までの10年間で変化していなかった。第3に、家族形態による貧困リスク格差には男女ともに年齢段階間での相違がみられ、これらの相違には、他の家族員扶養によるリスク負荷と家族内の相互扶助関係によるリスク低減の双方が反映されていた。

貧困リスクがとくに高いのは、50歳代後半以上で未婚を継続する男性および単独世帯居住の女性、20、30歳代で自身が親世代のひとり親世帯の女性だった。性別の相違として、男性では、婚姻状況による貧困リスク格差が年齢段階間の相違がみられた。他方で女性の貧困リスクは、男性よりも家族形態の影響を受けやすく、家族内扶助関係が欠如する場合に貧困に対して脆弱だった。とくに20、30歳代の女性で家族構成による貧困リスクの格差がきわめて大きかった。

##### (2) 結婚プレミアム・ペナルティの発生要因

就業所得の分析から、第1に、学歴と職業の影響を考慮した上でも、男性では有配偶者の所得が無配偶者の所得より高くなる結婚プレミアム現象が確認された。また女性には、有配偶者の所得が無配偶者の所得よりも低くなる結婚ペナルティ現象が確認された。第2に、男女ともに、個人の就業所得に対する影響は、親世代の階層的地位よりも配偶者の階層的地位の方が大きかった。男性では、妻が高学歴であるほど、そして妻の所得が高いほど、結婚プレミアムが大きくなっていった。他方で女性では、夫の所得が高いほど結婚ペナルティが小さくなり軽減されていた。これらの知見は、稼働力の見込みを含む階層的地位による配偶者選択の結果と考えられる。つまり、結婚プレミアム・ペナルティ現象をもたらす要因として階層的配偶者選択が関わっていると可能性がきわめて高いと判断される。

##### (3) 進学格差発生のメカニズム

出身家庭の経済状態だけ、ひとり親家庭出身だけ、あるいは兄弟数・姉妹数だけを独立変数として投入すると、低い経済状態そしてひとり親家庭出身が進学を不利にする効果はみられた。しかし、他の変数も同時に投入すると、文化資本論と相対的リスク回避説よりも、ウィスコンシン・モデルが観測データに適合的なものだった。つまり、良い学業成績と高い進学意欲の双方が高校進学（進学コースの高校への進学）と大学進学（難関大学または4年制大学への進学）を促進し、親の

学歴と職業の影響は弱いものでしかなかった。ただし、大学進学については、高校の進学コースから難関大学または4年生大学へ進学する顕著なトラッキング効果があった。

これらの知見は、教育達成における格差を発生させるメカニズムとして、成績と進学意欲の双方を重視するウィスコンシン・モデルが基本的に整合することを示していた。それと同時に、このモデルが制度構造的要因を軽視するものだという従来からあった批判にも合致すること、そして日本では高等教育進学に準備的な学校への進学が高等教育を有利にするトラッキングが顕著であることを示した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

鹿又 伸夫、婚姻状況・家族形態と貧困リスク、家族社会学研究、家族社会学会誌、査読有、26巻2号、2014、89-101

鹿又 伸夫、出身階層と学歴格差—階層的説明の比較—、人間と社会の探究、慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要、査読無、76巻、2013、1-28

<http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/>

鹿又 伸夫、結婚・配偶者と就業所得—結婚プレミアムと結婚ペナルティ—、三田社会学、三田社会学会誌、査読無、17号、2012、61-78

<http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/>

〔学会発表〕(計6件)

鹿又 伸夫、階層移動における安定性と流動化：ライフコース移動生起、数理社会学会、2015年3月14日、久留米大学（福岡県久留米市）

鹿又 伸夫、結婚プレミアム・ペナルティと階層的配偶者選択、北海道社会学会、2014年6月7日、札幌大谷大学（北海道札幌市）

鹿又 伸夫、結婚プレミアムと階層的配偶者選択、西日本社会学会、2014年5月10日、西南学院大学（福岡県福岡市）

鹿又 伸夫、男女のライフコースにおける結婚・家族と貧困リスク、北海道社会学会、2013年6月8日、北海道大学（北海道札幌市）

鹿又 伸夫、階層・家族と貧困リスクの変化、日本社会学会、2012年11月4日、札幌学院大学（北海道江別市）

鹿又 伸夫、配偶者の階層的地位と結婚プレミアム・結婚ペナルティ、北海道社会学会、2012年6月9日、國學院大学北海道短期大学部（北海道滝川市）

〔図書〕(計1件)

鹿又 伸夫、慶應義塾大学出版会、何が進学格差を作るのか 社会階層研究の立場か

ら、2014、160

〔産業財産権〕  
出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

鹿又 伸夫 (KANOMATA Nobuo)  
慶應義塾大学・文学部・教授  
研究者番号：30204598

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：